

『生きていくうえで、かけがえのないこと』

2016年10月12日

評論家で随筆家の若松英輔氏が著した『イエス伝』を感銘をもって読んだ。この本に刺激されて、イエスに関心を持ち、聖書を読んだ人が大勢いたのではないかと思う。若松氏は9月に『生きていくうえで、かけがえのないこと』を上梓している。日常的に体験している「書く、悲しむ、祈り」などの25のテーマについて、小説家の吉村萬壺氏とエッセイを書き、亜紀書房のウェブマガジンに連載した。二人のエッセイはそれぞれ、同じタイトルで同時発売された。『イエス伝』に惹かれたので、若松氏の方を読んだ。鋭い感性と深い思索に魅せられたが、何より言葉の確かさと強さに心を打たれた。無為に生きている自分を恥じた。心に残った言葉を紹介し、私の貧しい感想を書いてみたい。

「書く」ことについて。「うまくなど書かなくてよい。本当に心に宿ることを、手でなく、心で書けばそれでよい。どう書くのかと質問されると、今は、こう応えている。これが、自分が書く最後の文章だ、と書いて書くことだ。今書いている言葉は、生者だけでなく、死者たちにも届く、と信じて書くことだ。そしてこの文章は、誰か未知の他者が、この世で読む、最後のものになるかもしれないと思って書くことだ」。文章を書くことは、命を注ぎ尽くすことなのである。「身体は、一定の量の食べ物を欲する。しかし、心が求める言葉は量では満たされない。だから、たった一つの言葉でも充足を感じることもある。むしろ生きるとは、人生の、そのときどきに絶対に必要な、たった一つの言葉を探す営みだともいえる」。収税所に座っていた徴税人レビが、主イエスの「わたしに従いなさい」という一言に従い、彼は自分の人生を獲得した。私も一つの言葉で、人生を飛躍させてもらった経験がある。生きるとは、そういう言葉探しなのだ。

「悲しむ」ことについて。「他者の悲しみを完全に理解することはできない。それは本人にすらできない。しかし人は、それぞれの悲しみによって響き合うことができる。自分と異なる悲しみとの出会いのなかに、未知なる人生の調べを聞くことがある」。痛み、悲しみの経験が他人との関係を結び、多様な人生を悟らせてくれる。吉村氏は「まえがき」で、「中途半端な悲しみなど、彼（若松氏）は関心がない」と断じ、「何故か、それは、最も深い悲しみの中にしか真の救いがないということ、彼が経験上知っているからである。悲しみの底にまで達したことのある人間のコトバには、深い説得力がある」と書いている。若松氏は『イエス伝』で、イエスの「わが神、我が神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という十字架上の言葉がイエスのコトバを福音として今日のように広め、神への絶対的信頼と耐え難い苦悩の呻きは矛盾しないと述べている。

「念じる」ことについて。「人は、自らを超えた者を迎え入れるために、願望の部屋に祈念と念願がたゆたう場所を作らなくてはならない。あふれる思いを静寂な『念い』へと育てていかななくてはならない。そうした営みを私たちは、ときに『愛する』と呼ぶのではないだろうか。「祈り」について、「悲しみを愛（いつく）しめ それは 大いなるものから託された 稀なる宝珠である。他者の悲しみを愛しめ それは 聖なるものの顕われである。内なる悲しみを目覚めさせよ 悲しみを語る言葉は いつしか祈りに変わるだろう」と詠っている。神を眼前において、多くの願望を押し付けるところでは、虚無しか生まれてこない。沈黙して涙を流すところに、神を愛し、他者とも愛し合う関係が生まれる。キリスト教の祈りは、そうであろう。若松氏のエッセイを読み、心が洗われるような清々しさを覚え、今がどうであれ、生きることがかけがえのないことに思えた。